

行政視察報告書

平成27年8月4日

視察委員会名	教育民生常任委員会		
報告書作成者	西川 憲行 印		
出席者氏名	委員長 岡本 公秀 副委員長 西川 憲行		
	委員 今岡 翔平 高島 真		
	福沢 美由紀 森 美和子		
欠席者氏名			
所管職員氏名	観光振興室 本間 一也	随行職員氏名	議会事務局 山川 美香

視察日	視察先	視察目的
7月14日	福井県小浜市	①学校給食を用いた食育について ②観光まちづくりの取り組みについて ・小浜市おもてなし推進員について ・関係団体との連携について ・情報発信のあり方について ・若狭おばまフィルムコミッションについて
7月15日	福井県若狭町	①観光まちづくりの取り組みについて ・関係団体との連携について ・熊川宿まちづくり協議会の取り組みと行政の関わりについて ・情報発信のあり方について
	京都府南丹市	①観光まちづくりの取り組みについて ・情報発信の取組について ・美山町自然文化村「河鹿荘」について (運営形態、施設管理、法令、運営の工夫など)

◇視察概要 7月14日(火)

【小浜市】

1 御食国若狭おばま食文化館にて

小浜市に関する歴史から伝統工芸体験までの体験型ミュージアムにて、「日本の食の歴史」を見学しつつ、小浜市が取り組んでいる食育と、伝統工芸との関わり方、そこから派生する観光と産業についての説明を受けた。写真は、リアルタイムで、小浜の観光地を紹介するための情報掲示板であり、観光客のニーズをよく捉え、見やすさと分かりやすさに重点がおかれ、即応性のあるものであった。



御食国若狭おばま食文化館にて



情報掲示板



2 小浜市役所にて教育委員会より

前市長が、「食によるまちづくり」を推進され、平成13年に「食のまちづくり条例」を制定し、市の方針が明確に示された。その後、市長が交代しても政策の方針がぶれることなく、学校教育においても、食育による教育推進に取り組んでいる。学校給食は全校自校方式で、校区内の食材を出来る限り使用する校区内型地場産学校給食とし、「小浜市産」が地場産であるとの定義づけを行い、県との連携のもと、文部科学省の求める県内産30%以上はすでにクリアされており、市内産が60%を占めている。校区内の食材は、生産者が直接学校に納品しているが、毎日、食材の生産者を給食時間の放送で児童生徒に伝えることで、地域への愛着心を育むとともに、感謝の気持ちから残食が減る傾向にある。一方、地元生産者は、安心して安全な給食を食べてもらおうと減農薬や有機農法による食材の開発に努力するなど、相互に効果が出ており、学校給食法に謳われている目的が達せられるような工夫がなされている。

食育の重要性とは、心身の健康はもとより、本物を見極め、食を選択していく力をつけることが目的であるとしており、教育委員会の職員の説明は、分かりやすくその意気込みもすばらしかった。

また、実体験を重視し、生産者との協力の下で栽培、収穫の体験学習を行い、収穫物を給食の食材として使用されている。

さらに、「月に一度は、食事作りに取り組もう」を家庭に向けて推奨するとともに、中学生では部活動、小学生では遠足の弁当を自分で作るというような取り組みも行っている。

亀山市では、中学校2校の学校給食の在り方を教育委員会で検討しているが、議会として現在行われているデリバリー給食の検証と自校方式への試算も検討する必要があるのではないか。また、学校給食の基本を押えつつ、地方創生のひとつの考え方として亀山市の特徴となる学校給食の在り方は選択肢の一つとして検討できると感じた。

3 小浜市役所にて商工観光課より

小浜市は、水産業と地場産業の「若狭ぬりばし」を中心に古くから、交通の結節点として、栄えてきている中で、観光が人との交流による産業とまちづくりの基本政策になっている。現市長の公約の第1は、「観光によるまちづくり」であり、市長の思いによる観光政策が実行されている。

「知名度から認知度へ」という観点で、豊富な観光資源を生かし、外国人観光客受け入れの受け皿を作っているか株式会社まちづくり小浜「おばま観光局」を設立し、観光協会、商工観光課（市職員こそシティセールスをするべきのローガン）による官民一体のPRや計画がなされ、若い女性（観光もてなし推進員）や、主婦層の意見も取り入れるなどの新たな試みにより名産を生み出そうとしている。また、市民の意識を改革し、主役は市民であり来訪者にいかに楽しんでもらえるかを考えて重伝建地区の保存を進め、今後は生かしていくための方向に転換していくとの事であった。

さらに総務省の地域おこし協力隊も活用し、1年目は小浜の観光資源を検証してもらい、2年目、3年目で、自分なりの感性で観光プログラムを作り、案内をするなどの取り組みも行っている。

市長の思いから、フィルムコミッションにも力を入れており、その会長を市長が務め、市内の各種団体の長、商工観光課が中心となって運営している。民間の力を生かし、行政がサポートしつつ推進しているように感じられた。

また、市内には多くの案内看板や地図が設置されており、見て歩きには非常に分かりやすいと感じた。



小浜市役所にて

◇視察概要 7月15日(水)

【若狭町 熊川宿】

関宿をコンパクトにした感じの宿場町であり、美しい町並みだった。また、若狭の国の玄関口として交通の要衝であり、伊勢の国の玄関口となっていた関宿と共通点も多いと感じた。このまちでは、「まちづくり型観光」というコンセプトで、主体は住民のまちづくりであり、「熊川宿まちづくりマスタープラン」を策定して取り組んでいる。

また、古い建物をただ保存するのではなく、住みやすいモデルハウスに改修して、その家屋を宿泊施設とすることで魅力アップを図っていた。今後は、語り部の高齢化や、まちの過疎化などの課題を解決していく為の施策が必要になってくるとの事であった。

農家民宿、農業体験など、住民と来訪者がより親密に接することによって、リピーターの確保につながっているが、実際にはハードルも多く、すべてがうまくいくわけではないようであった。



熊川宿にて

【南丹市】

南丹市は、4つの町が合併により誕生した市である。そのうちのひとつである美山地区は、鉄道も高速道路もなく豪雪地帯であり、高齢化率43%で限界集落であるが、年間の観光客の誘客数は70万人で、観光と産業が密接に連携した政策を合併前から行っている。その中心は、213ものかやぶき民家の残る「かやぶきの里」である。この里の特徴は、歴史的価値を文化庁の調査で決定され、地区選定には、100%の住民合意がなされ、後継者のUターンや複数の移住者も存在していることである。この根底には、振興会という合併前から存在する住民自治の組織があり、亀山市で現在取り組んでいる「まちづくり協議会」と同じように「自らの問題は自ら解決する」という考え方で、簡易な行政手続きの代行も行っているということであった。



我々が宿泊した「河鹿荘」は、平成元年に町営施設としてオープンして、町の特別会計で運営していたが、変遷を経て現在は、指定管理者による運営が行われている。指定管理者は、地元優先、公募除外の考え方で、地元の「美山ふるさと株式会社」が運営しており、この会社の株主は、66%を市が出資し、残りを地元住民の個人株主が大半を占めるという方式をとっている。名産品は、ジビエ料理や加工食品、地元ブランドの美山牛乳などがあり、販売手法にも工夫をし、貴重な収入となっている。

近年は、海外、特に台湾からの来訪者が多いため、台湾でのPR活動にも力を入れており、京都に近い立地条件を活かし、外国人が好む日本風情、また、豪雪の風景を目にすることができる場所を売りに多くの観光客を呼び込んでいる。

財政状況に関係なく「選択と集中」で、位置づけを明確にすることで、より効果的に出来ることがあるということがわかった。説明いただいた職員から溢れ出る「我が町を愛する思い」に感動するとともにその思いが市民に伝わり、よい環境を作っていると感じた。



南丹市美山支所にて

【所感】

各視察先では、人口規模や財政状況、高齢化率に関係なく、課題解決の手段として、観光によるまちの活性化に力をいれていると感じた。そのためか、首長の「観光によるまちづくり」の思いが方針として出され、人的にも予算的にもかなりの投入がなされていた。観光ニーズは社会的な変化により全国的に発地型から着地型になっていることを分析した上で、観光事業の新しい施策や、手法など、型にはまらない取り組みで現状を打破し、若者や女性を呼び込むことで、産業の活性化や、高齢化の阻止を目指していた。

今後、亀山市も観光とまちづくりを合わせて考えながら、文化財や、自然を保護するだけでなく活用して、まちの産業のひとつにしていくべきである。地域を巻き込み、民泊やフィルムコミッションによる協働の取り組みを進めることがまちづくりに繋がると考える。

そのためには、産業と観光の一体化を行政の組織の中でも行うべきであり、誘客の絞り込みを行い、ニーズを明確に捉えてソフトもハードも整備するべきで、観光客が増えれば、それを目当てとする産業も育つと考える。そして同時進行で、住民全体が、観光によってまちが潤い、住民にも恩恵があることを認識しながら、まちづくり観光に積極的に参加できる土壌を作り、市民の意識を変えていかなければならない。

観光が政策の中心の市町を視察したが、一番大きな問題解決の糸口は、長のトップダウンによる取り組みに尽きると感じた。